

小学校社会科でのタブレット端末持ち帰りと連動した対話的学びの工夫

城井順一（熊本県高森町立高森中央小学校）・山本朋弘（鹿児島大学大学院）

概要：小学校社会科において、タブレット端末の持ち帰りと連動した対話的学びの工夫を行い、児童が多様な考え方や意見に触れる場を設定した。持ち帰った動画や静止画を用いて、家庭で説明資料を作成させ、タブレット端末の送信アダプタを用いてグループ内で説明資料を共有した。実践の前後で実施した意識調査を分析した結果、「学習意欲の向上」「学習の振り返りの充実」「多様な立場から考えること」について有意に高い結果を得ることができた。

キーワード：対話的な学び、タブレット端末、持ち帰り、多角的に考察する力、社会の見方・考え方

1 はじめに

新学習指導要領（2017）では「社会的な見方・考え方」を視点や方法とし、多角的に考察する力を身につけることが思考力・表現力の育成につながるとしている。多角的に考察する力を育成するには、児童が多様な考え方や意見に触れる場を設定することが重要である。

多様な考えや意見に触れる場の設定においては、情報共有で有効な ICT 活用は成果を発揮し、特にタブレット端末は携帯性に優れており、今後もさらなる活用が望まれている。タブレット端末を用いた持ち帰りの実践は武雄市（2015）の実践をはじめ、「反転学習」としてこれまで取り組まれてきた。その多くがコンテンツや動画等を用いた予習型の家庭学習であり、家庭学習と授業を結びつけた取組として報告された。これらの取組は、一定の効果をあげ、継続した取組となっている。しかし、この予習型の実践は、授業前に学習内容や手順を児童が把握するため、児童が見通しを持ち安心して授業に臨める一方で、多様な考え方や意見を引き出す授業展開が難しいのではないかと考えた。

また、山本（2016）は「授業と家庭学習の循環による能動的学習でのタブレット端末活用の考察」の中で、「タブレット端末を用いた家庭学習では、調査したり練習したりする活動に止まるのではなく、レポートやプレゼンテーション

で表現させ、他者と共有・交流する活動につながる必要がある」とし、家庭学習を授業の学び合いの場で活かしていくことの重要性について述べている。

そこで、本研究では、小学校社会科においてタブレット端末持ち帰りと連動した対話的学びの工夫を行い、児童が多様な考え方や意見に触れることができる場を設定した。このことにより、「社会的な見方・考え方」を用いて、多角的に考察できる力を身につけることができるのではないかと考えた。

2 研究の方法

本研究は、小学校第4学年社会科の「事件や事故からくらしを守る」において所属校第4学年21名を対象に検証授業を行うこととした。

単元前半では、地域の事故や事件が起きそうな場所を想定しながら、警察官の働きを中心に様々な人々の努力によって事故や事件が処理されていることに気づかせたい。単元後半では、安全なまちづくりについて、警察・地域・学校などが連携して取組を進めていること、地域の自主的な活動や行政の活動に地域の人が参画していることについて学習し、安全マップの作成を通して学習のまとめを行うこととした。

研究の流れを表1に示す。単元終末において、「安全を守る人の活動をまとめる」学習を設定し、説明資料の作成を家庭で行うこととした。

更に、作成された説明資料を教室に持ち寄り、グループでの情報共有・交流を行いながら、児童が様々な考え方や意見に触れることができる場を設定することとした。

検証方法では、児童向け意識調査として7項目を四件法（4：とてもそう思う，3：少しそう思う，2：あまり思わない，1：まったく思わない）で、単元の前後の計2回で実施した。また、「わたしたちの暮らしを守る」に関する知識の広がりを見るマッピングを4回（単元前，それぞれの家庭学習終了後，単元終了後）実施し，その変容を分析することとした。さらに，単元終末に安全マップ作成を行い，学習した内容を生活と関連づけて考えることができているかについて考察することにした。

3 実践の結果

①持ち帰った資料

表2に持ち帰った資料の分類を示す。学習で活用した複数の動画や静止画(警察の関連8点，地域の人の活動10点，その他学校の取組9点，合計27点)をタブレット端末に入れて持ち帰り，それらを活用し関係機関がどのように連携しているかに関する説明資料を作成させた。

持ち帰りに活用したタブレット端末は，本校のタブレット端末(一人一台環境)を活用した。資料の共有においてはデータ量が大きいこと(合計253.5MB)から，図1のようにタブレット端末の送信アダプタを使用することで円滑な情報共有を図った。

②授業の展開

まず，表1中の第1時から第4時では，教科書の資料などを丁寧に読み取りながら，事件や事故の処理，警察の日常的な活動，地域住民の取組について調査活動を行い，それぞれで活躍する人たちの工夫や努力について考えさせた。

毎時間，授業の振り返りとして5分間の学習感想の記入を行った。記入方法はこれまでのノート記述ではなく，情報活用能力育成の視点から情報端末を活用したデジタルワークシートに記入させた。当初は，内容も学習内容の羅列に

表1 本研究の流れ

学習問題「事故や事件からわたしたちの暮らしを守るオリジナル安全マップを作成しよう。」	
事前の意識調査・マッピング	
1時	調査活動
～	事件や事故の処理，警察の日常的な活動，地域住民の取組について
4時	説明資料の作成
家庭	○複数の動画・静止画持ち帰り
	○関係機関がどのように連携しているかについて考える
対話的学び	
5時	・説明資料をもとに発表・交流 ・関係機関の連携についてまとめる
安全マップ作成	
家庭	○危険箇所とその理由を記入
安全マップの共有	
6時	・友達の意見を参考に追記し，安全マップを完成させる ・感想交流後，学習をまとめる
意識調査・マッピング	

表2 持ち帰った動画・静止画の分類

資料	動画	静止画	合計
警察関連	3	5	8 (101.4MB)
地域関連	2	8	10 (76.8MB)
その他	2	7	9 (75.3MB)
合計	7	20	27 (253.5MB)

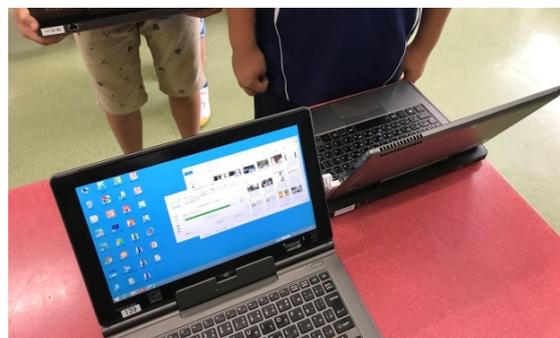


図1 送信アダプタによる情報共有の様子

なっていたが、回を重ねるごとに自分の考えなどに触れる内容へと変容していった。入力文字数も増え、表現の幅が広がっていった。

③家庭学習の様子

表1中の第4時終了後、これまでの授業で活用してきた静止画、地元の警察や交通安全協会、近隣の自治会長のインタビュー動画をタブレット端末に入れて持ち帰らせた。図2は家庭で説明資料を作成する様子である。児童は「警察官」「地域の人」「その他の人」の視点にもとづいて、それらの人たちが暮らしを守るために具体的などのような連携を行っているかについて説明資料を作成した。図3のように、説明資料は表として作成し、それぞれの活動内容を整理しながら、連携した取組について考えた。

④教室での対話的学び

表1中の第5時では、作成された説明資料をもとに、グループでの情報共有・交流を行いながら対話的学びを展開し、児童が多様な考え方や意見に触れることができる場を設定した。対話的学びを展開する中で、関係機関が連携し、地域の人と協力しながら暮らしを守っていることについて理解させることをねらいとした。

情報共有・交流の場面では4名編成班を4つ、5名編成班を1つ編成し実施した。図4は説明資料をタブレット端末で示しながら対話的学びを展開する様子である。それぞれ自分の作成した説明資料と比較し、意見を交流することができた。授業後半では、関係機関や地域の人たちの連携・協力はどのように進められているのかについて検討した。普段はあまり発言が多くない児童も、新たな気づきを説明したり、質問をしたりすることができた。発表を行う際には、その根拠となる動画や静止画を示しながら説明することができた。

⑤安全マップの作成

表1中の第6時に向けて、タブレット端末に学校周辺の地図データを入れて持ち帰り、家庭で安全マップの作成を行った。

図5は下校中に地図を確認しながら安全マッ

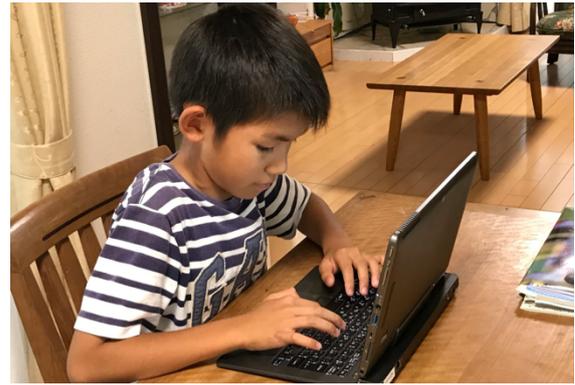


図2 家庭で説明資料を作成する様子



図3 説明資料の表に入力する様子



図4 教室での対話的学びの様子



図5 下校中に危険箇所を確認する様子

プに書き込む様子である。児童は、交通量や人通りの状況、道幅などを確認し、事件や事故が起こりそうなところを見つけ、記号を付けていった。その後、起こりそうな事故や事件を想定し、家庭において状況の書き込みを行った。

表1中の第6時では、各自が作成した安全マップをもとに、グループで情報共有・交流を行い、再び児童が多様な考え方や意見に触れる場を設定した。

4 分析結果

検証授業の実施前と実施後に児童向け意識調査を行った。質問項目は7項目とし、4件法（4：とてもそう思う、3：少しそう思う、2：あまり思わない、1：まったく思わない）で実施した。その結果を表3に示す。

意識調査の結果から、「①疑問を持って学ぶ」「②多様な立場で考える」について、1%水準で有意に高い結果を得た。これは対話的学びを展開する中で、多様な考え方や意見に触れることができたことや、情報を共有・交流することで新たな気づきが生まれたためであると考えられる。また「③学習を振り返る」についても、1%水準で有意に高い結果を得た。家庭学習との連携により学習を振り返る機会が増加したためと考えられる。さらに、「④進んで調べる」についても、5%水準で有意に高い結果となった。持ち帰りを含む家庭学習と授業の連携により学習意欲の向上につながったものと考えられる。

一方で、「⑤自分の考えを持つ」「⑥計画通りに進める」「⑦友達と協力して学ぶ」については、有意な差は見られなかった。これらの項目では授業前の値も高く、日常の授業においても児童が意識して取り組んでおり、大きな変化がなかったと考えられる。

5 本研究の成果と課題

本研究の成果と課題を以下に示す。

- ・持ち帰りと連動した対話的学びによる多様な考え方や意見に触れる場の増加は、学習意欲の向上、多様な立場で考える、振り返りの充実につながる事が明らかになった。

表3 児童向けの意識調査の結果

質問項目	授業前	授業後	t, p
①疑問を持って学ぶ	2.52 (0.51)	3.14 (0.48)	4.05 **
②多様な立場で考える	2.33 (0.48)	3.00 (0.63)	3.84 **
③学習を振り返る	2.57 (0.50)	2.95 (0.21)	3.16 **
④進んで調べる	2.81 (0.51)	3.14 (0.36)	3.16 *
⑤自分の考えを持つ	2.95 (0.67)	3.05 (0.22)	0.62 n.s
⑥計画通りに進める	3.14 (0.47)	3.19 (0.60)	0.28 n.s
⑦友達と協力して学ぶ	3.00 (0.63)	3.05 (0.59)	0.25 n.s

- ・タブレット端末を活用することで、説明資料の共有や、地図作成が容易になり、対話的学びの充実につながった。
- ・課題として、自分の考えを持つための支援のあり方を再検討すること、記述が苦手な児童に対する対応についてさらに検討していく必要がある。

附記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C）「授業と家庭学習を循環させるタブレット端末活用が思考力・表現力に及ぼす効果」（研究代表者 山本朋弘、研究課題番号 16K01120）の助成を受けて行った成果の一部である。

参考文献

- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
- 山本朋弘（2016）授業と家庭学習の循環による能動的学習でのタブレット端末活用の考察。日本教育工学協会。
http://www.jaet.jp/repository/ronbun/JAET2016_B-1-5.pdf
- 武雄市（2015）武雄市「ICTを活用した教育（2014年度）第1次報告書」。
<https://www.city.takeo.lg.jp/kyouiku/docs/20150609kyouiku01.pdf>